

令和 5 年 6 月 14 日現在

機関番号：27401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02782

研究課題名(和文) 近世東北の写本辞書に見える地域性の諸相に関する研究

研究課題名(英文) A Study of Aspects of Regional Characteristics in Early Modern Tohoku Manuscript Dictionaries

研究代表者

米谷 隆史 (Yoneya, Takashi)

熊本県立大学・文学部・教授

研究者番号：60273554

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：近世の東北地方で編纂書写された下記の辞書類(往来物や作法書を含む)の現存伝本や、各々の構成と内容を確認した上で、内部に反映した地域性の検討を行った。その結果を踏まえ、近世の東北において自身の方言がどのように意識されていたかの分析を進めた。  
主要な調査対象：福島県三島町の『雑補弁略銘記』(山ノ内吉右衛門編。1751年頃成立)、山形県米沢市の『増補旅使奏訓』(船橋源太左衛門編。1770年頃成立)、岩手県盛岡市の『所童早合点』(星川里夕編。1822年頃成立)、秋田県仙北市の『烏帽子於也』(須藤半五郎編。1824年頃成立)。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、日本語学研究の中では殆ど顧みられることがなかった近世の東北で編纂された辞書群について、各々の辞書の構成や所収内容、及び現存伝本の確認を進めた他、所収内容に反映した地域性を明らかにした。特に、19世紀前半頃の盛岡の寺子屋師匠星川里夕による『所童早合点』において方言語形を用いた語釈が施されること、18世紀中頃の米沢藩留守居役舟橋至親による『増補旅使奏訓』において「上杉風を唱へる」ことの弊害を踏まえて江戸表での言葉遣の注意が促されること等の背景を検討し、近世の東北在住者が自身の方言をどのように意識していたかに関する新たな知見を提示した。

研究成果の概要(英文)：I have reviewed the existing manuscripts of the following dictionaries compiled and copied in the Tohoku region in the early modern period, their respective compositions and contents, and examined the regional characteristics reflected in their contents. Based on the results, I proceeded to analyze how people were aware of their own dialect in early modern Tohoku. Below is a list of the main books in the survey.  
Zatsuhobenryakumeiki. Mishima Town, Fukushima prefecture, 1751. / Zohoryoshisoukun. Yonezawa City, Yamagata prefecture, Circa 1770. / Tokorowarabehayagatten. Morioka City, Iwate prefecture, Circa 1822. / Eboshioya. Senboku City, Akita prefecture, Circa 1824.

研究分野：日本語学

キーワード：辞書史 節用集 往来物 字尽 東北方言 圏点

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

節用集に代表される版本の辞書類が多数刊行されていた近世日本においてもなお、自らの生活圏・文化圏に即した辞書を編纂せんとする試みは続いていた。辞書類やそれに準ずる性格を有する往来物の編纂に際しては、それが「ことば」を対象とするという面において自身の言語意識が、また特定の「地域」を対象とする面においては自身の地誌把握が反映されることになる。本研究は各々の辞書や往来物の分析から、これらの意識を読み取っていくことを念頭に構想された。

### 2. 研究の目的

東北地方には角館の『烏帽子於也』(須藤半五郎編。1824年以降成立)盛岡の『所童早合点』(星川里夕編。1822年頃成立)福島三島町の『雑補弁略銘記』(山ノ内吉右衛門編。1751年頃成立)等の地域色豊かな辞書が伝存する。本研究は、近世出版史の所謂「三都」(江戸・京都・大阪)から離れた東北地方で成立した辞書群を対象に、次の3点を主な目的として実施した。

- (1) 各々の辞書が反映する地域の言語文化の様相を明らかにし、顕彰すること
- (2) 写本による和名集・色葉集・節用集に関する辞書史の記述を近世後期まで継ぐこと
- (3) 辞書の編纂行為自体に窺われる地域性の有無を検討すること

### 3. 研究の方法

『烏帽子於也』『所童早合点』『雑補弁略銘記』の伝本調査と撮影を行い、構成や内容、伝来の検討を進めた。具体的な調査地は、岩手県(洋野町種市図書館・盛岡市岩手県立図書館・盛岡市都南歴史民俗資料館)秋田県(秋田県立図書館・北秋田市内館文庫・仙北市総合情報センター)山形県(鶴岡市郷土資料館・鶴岡市致道博物館・米沢図書館・米沢市上杉博物館)福島県(二本松市愛蔵寺・福島県歴史資料館・福島県立図書館)等である。

また、上の過程で見出された東北地方の近世方言関係書の分析を行った。公開した論考において言及していないものも含め、分析の対象とした主な辞書・方言関係書は次の通りである(「研究の目的」で言及の3本を除く)、『和用類字』(1696年頃成立:国会図書館蔵)『増補旅使奏訓』(1770年頃成立:米沢図書館他蔵)『伊呂波字』(1632年写:二本松市愛蔵寺周辺にて成立。現在は報告者蔵)往来字尽写本群(近世後期成立:都南歴史民俗資料館蔵)。これらに加えて、近世期に刊行された節用集や字尽、往来物等、さらに過去の研究活動で収集した19世紀までの東北地方の文献類を参照しつつ、上記(1)(2)(3)の解決に努めた。

### 4. 研究成果

まずは構想当初より調査対象と定めていた3本に関する伝本調査結果とそれに基づく各々の構成・内容上の概要、さらに「研究の目的」記載の観点に基づく検討の結果を記す。

#### (1)『雑補弁略銘記』

福島県三島町個人蔵。所蔵者宅にて原本のカラー撮影を実施した。江戸中期に当地に住した山ノ内吉右衛門の編纂にかかり、イロ八意義分類体の節用集に類似の構成を採る。編纂資料として、倭玉篇や節用集、『書翰初学抄』等が用いられている。また、当地の地誌である『滝谷組(寛文)風土記』は、その内容が『雑補弁略銘記』に重なる所が多く、両書の関係の解明が課題であった。現地調査で『風土記』と『弁略銘記』とが同一人の筆跡であることが確認されたことから、『風土記』が『弁略銘記』の編纂資料の一つであることがほぼ確実となった。さらに、「会津順礼観音」三十三箇所の和歌を異文を含めて掲出する(第二冊付録)する点も、日本遺産のストーリーの一つである会津の三十三観音めぐりの史的記録として重要である。これと共に、辞書本文内にイロ八分類で掲出される周辺各地の名所の地誌的記録も詳細であることから、版本の内容を承けると見られる頭書の年代記部分と辞書本文の地域地誌記録部分を併せることで、日本国内と奥会津周辺との総合的な歴史把握が可能となるような形態が志向されているのである。横田冬彦氏は『日本近世書物文化史』第7章「思索する読書」の中で、武田家の遺臣の由緒を持つ上層農民の依田長安が、自身の読書経験の蓄積をもとに一族の由緒書や家訓を作成したことに言及するが、『雑補弁略銘記』は、山ノ内吉右衛門の読書の蓄積が辞書編纂につながった例と位置づけられる。

これを近世の版本節用集の変遷と照らしあわせるならば、次のような分析が可能であろう。18世紀初頭頃より、版本の節用集は、辞書本文の充実もさることながら、地誌や学芸に関する附録を充実させていく。これは商業出版物という性格上、畿内を中心とする日本の百科事典的な性格を志向したものであった。一方、『雑補弁略銘記』は、こうした版本の節用集編纂の方向性を受け継ぎつつも、自身の居住する地域社会に対応した百科事典の編纂を意図したものと考えられるのである。

本書に関しては、主要な調査先が小規模自治体であることから、感染症の流行により研究期間後半に十分な調査を重ねることができなかった。『雑補弁略銘記』の編纂資料と目される書物を追加調査の上、今後、上記の分析を含む論考の作成を進めることとする。

#### (2)『所童早合点』

岩手県立図書館蔵。編者星川里夕の編著とされる書物は岩手県立図書館他に計7種が存するが、いずれも近代の転写本である。里夕自身に関する事績も、武家の出らしいこと、盛岡市南部見前村で寺子屋師匠をしていたらしいことが知られるのみである。ただし、残された狂歌や狂文は典型的ながらも手慣れた書きぶりであり、相応の教養を有していた人物と見られる。また、写本のみ残る洒落本『津志田滑稽集全部屋』の版元名に「橋屋重三郎」の名前が見えることも注目される。本書が実際に刊行されていたのかは不明であるが、「橋屋重三郎」は、沿岸部（八戸藩領）久慈の豪商の世襲名であることから、見前村周辺に止まらない文化的交流を有していたことも予想される。

全体の構成を概観すると、前半に意義分類体の、後半にイロ八分類の「雑用平生遣ふ文字いろはよせ」を配しており、版本の節用集や往来物に存する内容と、見前村や盛岡藩領ならではの内容とが混在している。例えば意義分類体部分の分類名「田地高之覚」は「壹万五千三百四拾八石貳斗七升六合四勺五才」、次の「金子ト銭之覚」は「金子貳千四百六拾九両三歩半切銭三万八千七百三拾五貫六百拾壹文」が内容の全てであり、地域の石高や収支に関わる数値である。さらに「二郡之覚」は見前村が属する志和郡と近隣の岩手郡の村名、「所村屋舗之覚」は見前村内の集落（屋舗）名が並ぶ。「諸国之名付」はその見出語のみ引用すると「琉球 朝鮮 龍宮 長崎 大坂 京都 伊勢 関東 江戸 浅草観音 仙台 松島 塩竈 盛岡 宮古 鎌ヶ崎 大槌 尾崎 柳沢 秋田 松前 箱館 蝦夷嶋 津軽 青森」という具合であり、琉球から蝦夷までを掲出するものの、東北以外の地域は全くの摘記といえる。次の「所道中記」も、その「所」が意味するのは書名の「所童」の「所」と同じで、「鬼柳 仙台領の御境也 御番所 和賀川 舟渡 黒沢尻町」と奥羽街道の藩領南端から始まり「花巻」「見前町」「津志田」「物留御番所 船橋右の方に有」等、盛岡城下に至る街道沿い及び城下内の地名や寺社、名所、商家を掲出するものである。日本全国の中での盛岡藩領をごく大づかみに位置づける面もわずかに備わっているものの、基本的には見前村を中心とする藩領内の地域情報を詳細に記すという方針を採っているのである。

本書に反映した地域性は、上述のような地域情報だけではない。見出語に対する注釈に方言語彙を用いる例が存するのである。例えば「家普請（いゑぶしん）」の割注の「世に宿処（やどこ）といふ」、及び、「幼少（よふせう）」の割注中の「わらし」である。前者の「やどこ」は、『日本国語大辞典 第二版』が、「家の普請」の意味で青森県三戸郡、秋田県鹿角郡に、「屋根のふき替え」の意味で岩手県各地に、それぞれ近代の文献に拠って方言としての使用が存することを記している。この語については、見前村が後に属した都南村の『都南村誌』も「やどこ・やどこ無尽」の項（九七六頁）で、「屋根の葺替や、新築のときのユイは特にヤドコと呼ばれている」と記しており、当地での使用も確認できるのであった。こうした方言語形の記載は、近世の盛岡藩領における方言集として知られる1790年の『御国通辞』や、少し遅れた時期に編纂が進められていた『谷の下水』とは、その目的を異にするという点も重要である。『御国通辞』や『谷の下水』は、方言を対象化して取り上げるまさに方言集として方言語形を掲出するのに対し、『所童早合点』は初学者の学習に資するために方言語形を利用しているわけであって、ここに、地域における自身の言語の対象化の一類型を認めることができるのである。

辞書史に関わって付言すると、高橋久子氏は『いろは分類体辞書の総合的研究』の中で、「室町時代に流行した辞書の一類に、小型の意味分類体辞書、和名集がある」とし、確認できる一八本のうち六本は、巻末付載や合本の形で「いろは分類体の辞書を併せ持」つこと、また、「いろは分類体辞書、色葉字を主とする辞書も種々編纂され」、同じく確認できる一本のうち八本が「意味分類体の辞書を併せ持」つことを指摘した。また、こうした博物語彙の収録を中心とする意義分類体辞書が「末尾に特殊な部を立てて観念語彙を補う」ような形態は、「識字層の子弟のための初学者用辞書」として「日本・琉球・中国・越南において類似性を示す」（850p）とも述べている。イロ八分類体とその他の分類体の語彙集を合書する形態は、近世以降の版本にも受け継がれており、早く石川松太郎氏や山田忠雄氏によって、1659年刊『童訓集』、1716年刊『四民童子字尽安見』、1799年刊『文章字尽節用解』等が紹介されている。漢字で表記される語を中心とするものに限らなければ、和歌や俳諧の用語辞書にも多く見られ、方言に言及する語彙集として知られる1779年刊『雅言俗語 俳諧意擧』もこの形態を採っている。『所童早合点』や次項に言及する『烏帽子於也』もその驥尾に付く辞書ということになるのか。高橋氏はまた、イロ八意義分類体の古本節用集諸本と比較してこの形態の中世辞書に文書用語の収録や異体字の掲出が多いことを示してその実用辞書としての性格を裏付ける例証としており、報告者も過去に、後者の類の辞書に方言の反映が目立つ旨の報告をしている。このような点を勘案して『所童早合点』の特徴を見ると、初学者向けの実用的な辞書には、時代を超えた共通性があることが改めて認識されよう。以上の分析は、既に論考にまとめて公刊済みである。

### (3) 『烏帽子於也』

『所童早合点』と同様に意義分類体の字尽とイロ八分類体の字尽とを合わせた形態を採る。現存する次の伝本の確認と撮影を実施した。

仙北市総合情報センター本...近世後期写。須藤半五郎自筆との伝承がある。

北秋田市内館文庫本...1859年井口氏写。

秋田県立図書館本...1861年佐藤信敏写。

潟上市石川翁記念館本...1845年石井忠克写。上冊の見返しに忠克の息忠義が「予が子忠民に写して給う書ゆへ」粗末にすべからざる旨を、また下冊の後見返しに忠克の孫の石井忠

民が、本書を粗略に扱ってはならないことと、世相が移って同苗親族に過去を伝える書物がほとんど保存されていない状況を嘆く旨を、それぞれ加筆する。  
東北大学狩野文庫本...江戸後期から近代初期写か。  
秋田県立文書館本...1881年井口正兵衛写。奥書に、以前所持していた写本を或る人物に貸したが誰であったか忘れてしまったので、改めて書写した旨を記す。上の内館文庫本の奥書に「井口氏」とあり、書体も両本相似ることから、本伝本は内館文庫本と同一人の書写の可能性がある。

1972年刊行の『新秋田叢書 十五』が収める同書翻刻の解説には、「現在この本の稿本が五部ほどあり」、「若干の異同があるが、いずれも筆者の手に似ている」と記すものの、角館周辺には新秋田叢書が底本とした仙北市総合情報センター本の伝存が確認できるのみであり、同時期に刊行が進んでいた『角館誌』が引用に用いた別本も所在が不明となっている。本書についても、主要な調査先が小規模自治体であったことから、研究期間後半の調査活動を実施することができず、50年前には存在した他の4本の稿本の探索に着手することは叶わなかった。しかし、その他の伝本の探索に方向性を改めたことで、『烏帽子於也』が編者須藤半五郎の死後も、角館を代表する初学書として重視され、書写が重ねられていたことが明らかになった。

また、上記のいずれの伝本の付訓にも、東北方言に顕著な連母音の音訛や力行・タ行の有声化、新秋田叢書の解題も言及するシとスの混同等が仮名遣に反映されており、魚名等には方言語形も見える。本書も『所童早合点』と同様に、意義分類体とイロ八分類体の合冊型の辞書の類型に叶う一本と位置づけられることとなった。

#### (4) その他

感染症流行下で各地の調査活動が制限されることになったため、書物内の情報のみで検討を進め得た次の2点に関する分析を進めた。

##### 『増補旅使奏訓』

1770年頃に米沢藩士舟橋至親が編集した江戸留守居役マニュアルとでも称すべき書物である。市立米沢図書館に数本が収蔵される。本書は、江戸において「上杉風を唱へる」者の弊害を述べ、言葉遣や振舞の有り様を正すために記された書物である。そのため、米沢の武士言葉と江戸言葉を比較して提示する項目が多く見られる。職掌が明確な武士による記述として価値があるものと認め、分析結果の一端を論考にまとめて公刊した。

##### 19世紀東北の文献に見えるガ行鼻音への圈点使用について

幕末の三閉伊一揆の首謀者の一人である三浦命助が記した文書において、ガ行鼻濁音にあたる仮名に圈点が付されていることが報告されている。この背景について次のような分析を行った。本研究期間内に調査を進めた近世後期の東北の辞書群には、ほぼ全てに東北方言に顕著な力行タ行の有声化を反映する濁点の使用が見られた。したがって、このような濁点の使用が通例となっている文字社会が近世の東北に広く存在したと見てよい。一方、このような濁点の頻用は仮名連続が有する表語機能の低下をもたらすものでもあるため、改めて(本来の)鼻濁音と母音間に生じた有声化とを区別しようとする志向が生じうる。命助の圈点使用はこの観点から説明するのが適当と考えるわけである。この提案を論考にまとめて公刊した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 米谷隆史	4. 巻 27
2. 論文標題 近世後期の往来物に見る地域性の反映について - 盛岡藩領見前村の字尽『所童早合点』を例に -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 熊本県立大学文学部紀要	6. 最初と最後の頁 1 18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 米谷隆史	4. 巻 48
2. 論文標題 十九世紀の東北の文献に見える圏点をめぐって	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 金沢大学国語国文	6. 最初と最後の頁 31-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 米谷隆史	4. 巻 42-2
2. 論文標題 近世方言書生成の現場 米沢と熊本の武士による編述書二点から	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本語学	6. 最初と最後の頁 78-85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 米谷隆史
2. 発表標題 十九世紀東北の文献に見える圏点について追考
3. 学会等名 第287回筑紫日本語研究会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------